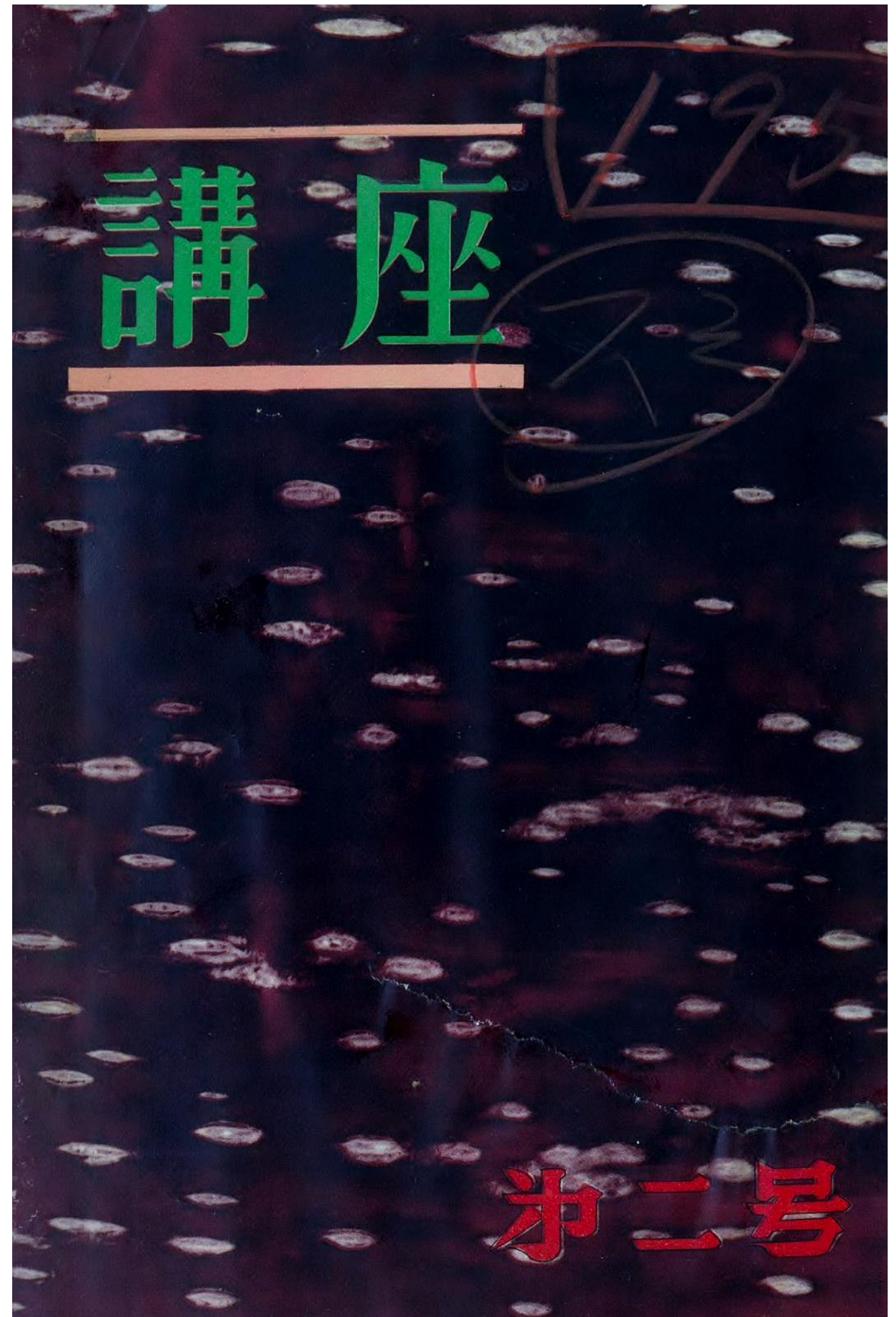




195  
講座 第2号  
33.3.15発行

前穂高に弟を失

—「氷壁」のモデルとなった  
「ナイロン・ザイル事件」の真相—  
石岡 繁雄



講座

195

第2号



私はそこにいた

昭和三十年一月二日朝、前穂高岳付近で三重大学一年生山田君(18)が転落、遭難した。若山君の体に入っていたナイロン・ザイルがきれたため、絶頂に落ちたといわれたナイロン・ザイルがきれたということから社会問題となった。このため、その現場にいた石原君は、あらぬ疑いをかけられて苦しい立場に追いこまれた。この問題は、井上靖氏の小説「氷壁」のモデルとなった。(当時中央大学経済学部四年、石原君利(二十七)一現在、各大学生部に選出された若山君の友人、石原君利氏とともに絶頂へ入ったザイルの切れた絶頂の岩角(X印)と若山君が足をつけていた岩(O印)内は石原君

前穂高岳(1) 石原君利氏  
△山田君は、前穂高岳の絶頂に落ちた。ザイルは、山田君の体に入っていた。ザイルがきれたため、絶頂に落ちたといわれた。石原君利氏は、その現場にいた。石原君利氏は、あらぬ疑いをかけられて苦しい立場に追いこまれた。この問題は、井上靖氏の小説「氷壁」のモデルとなった。(当時中央大学経済学部四年、石原君利(二十七)一現在、各大学生部に選出された若山君の友人、石原君利氏とともに絶頂へ入ったザイルの切れた絶頂の岩角(X印)と若山君が足をつけていた岩(O印)内は石原君

氷壁

井上靖

眼前を落ちゆく友

切れぬはずの命綱がぶつり



無限の感動を誘って  
数百万読者を魅了した  
井上靖の巨篇

(一) まえがき

昭和三十年一月二日、前穂高岳で私の弟が墜死した事件は、遭難という登山界では別に珍らしくない事件であるようにみえたにもかかわらず、新聞、ラジオ、雑誌で再三とりあげられ、山岳連盟から声明書が出されるとか、学者二十一名の要望書が発せられるとか、はては、朝日新聞連載小説にとりあげられ、しかも今なお未解決の問題として、社会問題化しつつある。それはこの事件が単に遭難墜死という当初の事件からはなれて、全く内容を異にする新しいしかも今後の社会に大きな影響を与える予想される事件に発展したからであるが、私はこの事件に当初から関係した者として、以下拙い見解を述べさせていただきます。

なおここでは紙面の関係で、この事件の前半のみを、しかも私のまわりにおきたことを中心に申し述べてゆきたい。

(二) 前穂高での遭難発生

元気に送り出した弟がそのまま帰らず、半

年へた七月三十日、雪の中から発見され、骨となつて生家に戻つてきたときのこと、昨日のこのように思い出されるのに今年の一二月二日にはもう満三年の法要を営んだのである。今ここに、悪夢のような過去三年を振り返るのであるが、それにはまず私達の登山仲間、弟、私達の自己紹介から初めねばならない。

私は、八高山岳部に入って本格的に山へ登るようになり終戦後は、岩稜会という山のクラブを作つて大いに山へ登つていた。(現在、名大須賀教授を顧問とする約五十名の会)これは余談になるが死んだ弟(五期という)の山への登り始めは、次のようであった。

昭和二十一年の夏、私達が穂高の屏風岩に登ろうと屏風岩の前に天幕を設けているいろいろ苦心していた時、復員したばかりの下の弟が当時小学五年生の五期を連れて、敗戦直後でパスもないので徳本峠を越してやって来たがそれが五期の初めての登山であった。

が低くて手掛や足場が高くて屈かず、ブツブツ云つていたものである。その弟も大学に入る前には入試準備で山へ行かず大いに弱つていたが、大学に入つてからは、私のつくつた岩稜会に入り俄然山へ登るようになった。二九年の春には穂高へゆき北尾根を登つて雪の前穂高頂上に立った。その時のニコニコ顔の写真を見ると、あと九カ月でこの直下三十米の所で墜死することになるとは夢にも思われない。七月と八月には南アの北岳バットレスと穂高の奥又白へ、又秋には穂高の岳沢に入り、例の洞爺丸遭難のときの暴風でほうほうのういで逃げ帰つたものである。その二カ月経て又冬の穂高へゆくことになったがこれが弟の最後の山行となつたわけである。この計画は会としても相当なものであった。たまたま私は所要のため参加することが出来なかつたが、前穂高の今日事件の起きた東壁とか冬期未登攀の前穂高四峰の壁を登ろうというようなものであった。ザイルが不足していたので何か求めなければならなかつたが、なけなしの金をはたいて日本で唯一のザイルメーカーである東京製綱からナイロンザイルを購入したのである。

ナイロンザイルはすべての点で従来の麻ザイルに優るとどんな山の本にも書いてあつたし、そこをもつて来て日本山岳理事の金坂さんとアメリカのウエクスラー氏から麻ザイルは衝撃に対しては意外に弱いという論文と実験データが発表されていたので、私達も、ザイルはナイロンザイルに限ると思ひこんでいたからである。又事件直後に入手したのであるが東洋レーヨンのパンフレットに、「生命綱」という見出しで、金属のギザギザのヘリにこすりつける実験でもナイロンは麻の三倍も強いと記るされてあつたくらいで、ナイロンザイルが麻ザイルに比して岩角にかつた場合は極めて弱く岩登りに使用することは危険だなどということもより誰一人夢にも知らなかつたことである。ただナイロンは紫外線に触れると弱くなり方が早いというのであつたので、私達はナイロンザイルをキャンパスの袋に入れて山へ持ってゆき、いよいよザイルをつけるといふときに袋から出すことにしていた。

さて一行十二名を山へ送り出したが虫の知らせといおうか今回ほど落ちつかなかつたことはない。私の代りにリーダーとなつて山へ

のひきつった顔、私は居残り部隊を集めて翌早朝出発、その晩の十二時にはふらふらになつて上高地の木村さんの家に着いていたのであつた。

しかし事態は電話で聞いた通りで少しも変わっていない。万一の救出をただ祈るのみである。翌日夜遅くフラフラの隊員から報告が入つた。ザイル切断、弟は行方不明、石原、沢田は救出され明日にはこゝへ降りてくる。残りの者で本谷の絶壁の下を探索するというのである。私は三人とも駄目だと覚悟していたので二人救出されたということにむしろ喜んだ。しかし次の瞬間には「あゝ弟を失つたか」という悲しみが全身をうずき老いた両親の顔が交互に浮んでくる。「ゴロウノミゼツボウサイダイノフコウヲオワビシマス」両親へ打つ電報を鳥々の局へ頼むため電文を大声で繰り返しているうち、私は泣けて来てどうしようもなかつた。翌日には石原と沢田がソリで運ばれて来た。慟哭が小舎中に満ち満ちた。二人とも凍傷で手も足も繻帯をしているので涙は他の者がふいてやる。凍傷の重い沢田は翌日下げられ、石原(弟)は捜索隊の帰りを私達と一緒に待つことゝなつた。そここ

ゆく石原(兄)と出発直前一晩語り合つたが、私は計画の縮少を一生懸命にすすめていたし、母の信仰の受け売りをしたりして来た。こういう気持は彼等が元気に出発してしまつたらどうすれゆくものだから、今回はつかみどころのない心配がもやもや私の頭を占領して黙つている時間が多くなり、他の人から「どうかしているんじゃないか」と再三注意を受けたほどであつた。私はしばしば幻影におびやかされて来た。腰までもぐる深雪の中をワカンをはいて十貫をこす重荷をもつて、雪の中に頭を突き込むようにして松高ルンゼの急坂を登つてゆく一行の姿。雪面が破れ、ごうぜんたる新雪々崩、雪と真黒い人間と、もつれ合つて落ちてゆく姿が通動電車の雑踏の中でも私の頭をかすめる。又岩壁の手掛りが小さくて手袋をはめておれない。口で手袋をはずす。みるみる感覚が遠のいてゆく、不自然なバランスでアイゼンをつけた足首がガクガクしている。「長びいてはいけない、早く登り切つて上のテラスで休憩しなきては」と手掛りをぐいと握つて全体重をかける。とたんに墜落、氷壁、氷片をけとばし雪

煙りとともに真逆かさまに落ちる。ザイルがうしているうち、今は兄弟三人となつてしまつた残り二人の弟とか、多くの友人が急を知つてぞくぞくと木村さんの家に集結した。悲しみが一応おさまると、何故ザイルが切れたかが問題の焦点となつた。石原は「五朗ちゃんはずか五十種ほどすべつただけなのにザイルはプツリと切れてしまつた。ザイルは岩角の所で切れたと思うがあんな弱いザイルはない」と繰り返している。しかしナイロンザイルがそんなに簡単に切れるとは考えられないことであり、私達はそれをどう解してよいかわからなかつた。しかしこのとき明神の養魚場から新しいニュースが入つた。それはこの十二月二十九日東雲山溪会の人が前穂高の隣りにある明神岳の東壁を登つていて滑り、ナイロンザイルが何のショックもなく切れたというのである。落ちた人は雪のふきだまりに頭からまっすぐに突きささり、発見されたときは足だけ雪の上に出ていたということであつた。掘り出され人工呼吸の末息をふきかえされたというのである。(頭に重傷を負われたが幸運にも死をまぬがれた)又ザイルは墜落中岩角にひっかかつて切れたように思うとの事であつた。私達はこうなつては真剣に

蛇のよりのたうち、次の瞬間恐ろしいほどに緊張する。ハーケンがね飛び、確保者にひきおとす、人間が岩にぶつかると。あの鈍い音、ハーケンが凍つた岩にあたるあの澄んだ音、私は汗びっしり夢から覚める。という事が続いた。

正月二日は運命の日である。私は珍らしく正月を田舎の家で過ごしたが友人は皆山へ行つていて、結局何もする事はない。二日の夜子供を連れて映画を見にいった。その時私は突然「すぐ帰れ」という呼び出しを受けたのである。子供の手を引っ張つて道を急ぐ私には心臓の鼓動のほか何もわからなかつた。鳥々の警察電話で中継されてくる上高地からのリーダー石原(兄)のとぎれとぎれの電話を聞いた。「誰がやられたのだ」「ゴロチヤーン、クニトージ(石原の弟)サワダー」「どんな様子だ」「昨晚は前穂高東壁Aフェースでビバーク、昨夜から猛烈な風雪、救援は不可能」「まだやられたという確証はないのだな」「しかし駄目です」「何故もつと救援に努力しないのか何故下りて来たか」「私だけ連絡に下りて来た」「すぐ出発する。とにかく冷静にやるように」ぞくぞく集る家族

考えざるを得ないと思つた。何か今まで知られていない重大な欠点があるナイロンザイルにあるのではなからうかという疑問が私達の頭をうずまいた。私は金坂さんの数式でうずまいた確信論を思い返してみたが、如何なるヒントを発見することも出来ない。しかしまもなく私達はナイロンザイルが岩角にかつたときには麻ザイルに比べて切れやすいのではないかと疑問に到達した。ビニールの布が引張つていけば強いが少しでも傷がつくと簡単に破れてしまうことを連想したりした。翌六日早朝、弟達は捜索隊を待たずに帰つて行つたが夕方松本から電話をして来た。それは新聞に「ナイロンザイルは果して切れたか」という題で一ページのほとんどをうめて大々的に掲載されていたというのである。弟は電話口で興奮しながらそれを読んでくれた。要するに「ナイロンザイルは弱いはずがないからザイルが傷ついていたか古かつたのだらう」というのである。私達はこの記事は危険だと思つた。とにかくこの不可解なザイルの切断事件が二件も相ついでおきています上、それを単にザイルは強いが取扱いがまずかつたということでは甚だ危険で、少くと

も、石原のいうようテストを経た後でなければ即断は許されないと考えた。私は疲れた頭で新聞社に発表するための原稿を書いた。

まずそのザイルを購入したときの模様（保証付ザイルといったこと）遭難の模様、とくにザイル切断時の関係位置を石原からきいて詳細に記した。最後にその原因としてナイロンザイルが穂高に普通に見られるような角の丸くない岩にかかった場合には麻に比べて非常に弱いのではないかという疑問を記したのである。翌日には、深雪のため捜索も空しく（実際には彼等は遺体の上を歩いていたはずであった）全員が引き上げて来た。かくして私達は弟を雪の中に残したまゝ穂高を去ることになったのである。帰路、沢渡でバスを待つ間の約二時間を利用してナイロンザイルと麻ザイルをナタでこもこも切ってみたが、ナイロンザイルはサツと切れるのに麻ザイルはゴシゴシと鋸のようにひかなければ切れない。私達は、こゝにおいてナイロンザイルが岩角に弱いにちがいないという確信を高め、報告を一刻も早く社会に発表して次の遭難を未然に防がねばならぬとただそれだけ思った。しかしよもやこの報告が因となって恐ろ

しい事件が発生してくるとは夢にも思わなかったのである。松本について夜行を待つ間に手分けしてレポートを七部ほど写しとった。そして朝日、毎日、読売、中日、信毎に電話し、記者に來てもらってこのレポートを渡したのである。（しかし全く報道されなかった）又私は名古屋に着いてから、同郷の中日の宣伝部長のW氏宛に郵送した。私達は名古屋から名鉄に乗り換え三週間前、に弟がこゝから出発したその故郷の地、津島に着いたのである。まだあたりは暗かったが、提燈を持った村の人達とか中学の恩師、小学校の友達に迎えて戴いた。両親は家の前に立っていた。泣かないつもりでいたのに全身をしぼるように涙があふれ出た。

### (三) ザイル切断原因についての論争

私が名古屋駅からW氏宛送った原稿は一月十一日、十二日の両日にわたって大体原文に近い形で図入りで掲載された。この発表は登山、社会に大きな影響を及ぼした。活字とか書簡とか人の口を通じて私の耳目にいろいろなことが入って来たが、それらは結局私達の

発表を正しいかもしれないと見るものとそれを逆に信をおき難いとみるものとに大別された。しかし、もし正しいとすればこの事件は今後どう発展するであろうか、又逆に正しいとすればどう発展するであろうか、私は上高地で書いた報告を何もそうした結果を考へて発表したのではなかった。ただ登山者の安全を守るために早く発表せねばならないと考へただけであるがこの発表の影響は、私達の考へたような単純なものではなかった。

### (四) 私達の発表が正しいとすれば、

一月十五日の朝日新聞は「今日の問題」で切れたザイルと題して「ザイルが何米も真直に落ちて切れたというのならともかく五〇糎かそこら落ちただけで切れるとはおかしい、そんなものは藁縄より弱いものである。最近では保証付と称して粗悪品を売るメーカーが多い。この事件は徹底的に究明されるべきだ」と報道し、一月十七日にはNHK「私達の言葉」で私の父の言葉として「息子は新製品の試験台となって、あたら若い生命を落した」と報じた。これによってわかるように、事情によつては、メーカーは過失致死罪で起

訴される恐れがあり又遺族から損害賠償で告訴される恐れも多分にあった。とにかく、メーカーは単にこの疑惑が出て上記のようなものが新聞やラジオに報道されただけでも「原因がわかるまで一時ナイロンザイルの使用を中止してもらいたい」と登山界に申し入れ、ところによってはナイロンザイルの回収を行なわざるを得なくなり、又その影響はザイル以外のロープにまで及んだのである。たとえば雑誌「インダストリー」に掲載されたものによると、昭和二十九年では、上半期、下半期を通じてナイロンの全消費量の四〇・九パーセントが漁業用ロープとなつてゐるが（靴下は九パーセント）この事件の起きた三十年上半期には二九パーセントと激減している。これは大阪のM運動具店のS氏が山岳雑誌にメーカーは大損害をこうむつたと書かれてゐることからもよくわかることである。だからもしも本当にザイルが粗悪品だったとなれば、メーカーとしてはたとえ森永ミルク事件のように、今後少なくともある期間は一層苦しくなることが予想されるのである。

### (四) 私達の発表が正しくないとせば

しかしこれに反し私達の発表が正しくないとすればどうなるであろうか。事実「登山者のおこがれの的」となつていたナイロンザイルがわずか五〇糎のずり落ちで切れたという私達の発表はあまりにも意外であつたため、その発表が虚偽ではないかという見解が次々と出てきたのである。ザイル業者であり、事故をおこしたザイルを販売したK氏から石原によせられた書簡には「ザイルは切れたのではなく結び目が解けたのではないか」という意味のことが述べられてゐる。これは私の父とザイルメーカーの代表との会話でも、メーカー側からこの意味のことが述べられ、ザイルの欠点だという父の主張と対立し、会談は決裂してゐる。

さて結び目が解けたかということについて、ナイロンザイルは、つるつるして結び目が解けやすいことは事実であるので、この疑いは一応もつともであるが、石原に向つてこの質問が出されたとなると石原としては、全くやり切れないことである。つまりザイルの結び目が解けた場合には、石原の手に残ったザイルの先端というものは、きちんと処理されたものままであるが、ザイルが切

れた時の先端というものは、燃りがもどつてバラバラである。

石原は救出されたとき「ザイルが切れました」といつてバラバラの端をみせてゐる。その石原に「ザイルが解けたのではないか」と質問することは「実際にはザイルが解けて墜落したのであるが、それを言ったのでは登山家として恥になるので、お前は誰もみていないことを幸として、ザイルが切れたことにしよう」と考へて、ザイルを切つてその先をどこか捨ててしまつたであろう。お前はそれでもいいかもしれないが、そのため登山者はナイロンザイルがそんなに弱いかと不安をもち、メーカーは大損害をこうむつてゐる。お前は実に大それたやつだ。さあ切つたザイルの端をどこかかくしたか白状しろ」と質問してゐると同じである。石原は既にザイルは切れたと発表している以上この質問には答へられる性質のものではない。しかし私はこの質問に対して返事を出さずにおくということでは、このウワサがますます、本当のように宣伝されてゆくであろうと考へ肌寒いものを感じずにはおれなかつた。ザイルが解けたのではないかという疑惑は、いうまでもなく墜落

した弟にとっても重大である。ザイルの結び目が解けて墜落死したなどということは、全く登山者にもあるまじき軽率さである。もしも、事実そうであったとなると、私達遺族として社会の方々に対し、申し訳ない限りである。もとより、私はそうでないと確信しているがしかし誰が一体それを、証明出来るのであるだろうか。その頃、私は両親と悲しみをわかつたため、私の現住所名古屋から津島へ足しげく帰っていたが、私はこの頃から、顔見知りの近所の人、又村の人達にあつても、何となく肩見の狭いものを感じはじめたのである。私は村人をさけて歩いた。こういうことでは、かえっていけないと思いつつも、そうなつてゆくのをどうしようもない。

この疑問は弟の遺体が発見され、遺体にザイルが結ばれたままで、ついていること以外には証明がつかない、私は弟の遺体を発見するまでは、何もいうことは出来ないと考えたのである。話はよこ道へそれたが、ザイルが弱いという私達の説をあやしいという考え方に決定的な影響を与えたものは、早稲田大学助教授であり著名な登山家であるS氏(目下アフリカ遠征中)の雑誌「化学」への発表で

あつた。それは「ナイロンザイルはそんなに弱いはずはない、誰も第三者のみていないことを幸いとして、実際には自分達が、ザイルを傷つけていたのをかくして、罪をザイルに転嫁したのである」というのである。

(この記事は、七月号に掲載されたが、事件直後S氏はそう語られていた)しかし、石原の発表に疑いをもつ見解のうち、表面にあらわれたものとしては上述のものであるが、実際には次のように、更に深刻なものを含む。それは登山者ならば誰一人知らない者のないかの有名なマッターホルン事件である。マッターホルン事件を簡単に述べれば次のようである。「一八六五年、英人エドワード・ウェインパーのひきいる、七名の登山者は、欧州アルプスの名峰マッターホルンの初登頂をなしたが、下山の途中四名が墜死し、ウインパーを含めた三名が生き残つた。生存者の報告によれば「下山の途中、先頭の一人が足をすべらせた。七名は互にザイルで結びあつてい

たため、つぎつぎとひきずり落とされ、結局五人目のタウグワルダの前でザイルが切れ四人が墜死し三名が助かった。

切つたのではないか」という疑いが生き残つた者にかかり、警察の取調べをうけたが、墜死者の妹が「ザイルを切つたのは、兄自身であつた。たまたま、私は山の麓にいて、その状況を望遠鏡でみていた」と被容疑者に対し有利な証言をなしたので、当局の追求が停止されたが、それでさえ、本人は社会のきびしい疑惑の中に立たされ、自暴自棄におちてゆくというストーリーである。

いづれにしても、死因に対する疑惑は一生つきまとうものであり、本人にとっては、正に致命的である。

特に今回の場合、石原は、「保証付新品がわずか五十糎のずりおちで切れた」といつている。登山界、社会が石原に対し「万能をうたわれたナイロンザイルが、五十糎くらいおちただけで切れるものか、苦しまぎれにでたらめをいつている。実際は何をしたか、しれやしない」という疑いをまともにかけるのは、当然すぎることである。又今回の場合「マッターホルン事件」とか、映画「死の断崖」と異なるところは、石原の発表がザイルメーカーに大きな損害を与えている点である。例えばマッターホルン事件では、はっきり

のとき使用しないはずの古ザイルを使用していたからである」というのである。

しかし、一般社会はこの報告を信用せず、「タウグワルダは自分の生命を助かりたいために、故意にザイルを切つて仲間の四名を、おとししまつたのではないか」と死因に関する重大な疑惑を、タウグワルダに向けたのである。

これについてウインパーは「ザイルの切れ口をみてもらえばわかる。それにあのときの場合、ザイルを切れるものかどうか考えてもらいたい」と幾度も弁明した。スイス政府は査問委員会まで設けたが、タウグワルダへの疑いははれず、結局タウグワルダは村人の冷い目にたえられず、永年住みなれた村を立ち去り、外国に逃れ、悲しい一生を送つた」というものである。即ち「古いザイルで四人も墜落したのだから切れたのは当然だ」といつても、結局そこには第三者がいないので不明朗なものが残り、疑いははれないのである。これとよく似た例が、数年前に大映で製作された「死の断崖(上原謙、島崎雪子主演)」である。これは二人の登山者が岩登り中、一名墜死したがそれについて「ザイルを

と「切れたのはザイルのせいではなく、古いザイルを使った。私達の不注意だ」といつているが、これに反し、今回の場合は「ザイルが不良品であつた」といつているのである。いづれにしても、もしも、石原の発表がウソだったとなると、石原はメーカーに与えた損害の責任を負わなければ、ならないことになる。

早稲田大学助教授S氏の発表のように「故意にいつわりを公表した」となれば信用毀損罪(刑法二三三条・いたずらに虚偽を流布して他人の信用を傷つけた者は三年以下の懲役云々)が成立し、かりに過失であつたにしても、メーカーから損害賠償を告訴される可能性はもちろんある。同時に石原は一行のリーダーであつたことから、死因に関し遺族から告訴されるという事態が発生しないでもない。(リーダーが過失致死罪で起訴され、三十年七月四日罰金三万円の判決を受けたという事件がある。芦別事件)朝日新聞にして、も、そういう、うそを軽々しく信じて良心的なメーカーを悪徳メーカーとしてはげしい攻撃をかけたということ、批難されることは明らかである。

#### (四) ナイロンザイルの岩角欠

点という私達が提出した

仮設立証の必要性

(1) 死因鑑定のため……上述のように弟の死は当時、その原因がどこにあるかわからなかつたのである。しかもその死因には極端にいえば、犯罪容疑がかかっているのである。死因そのものはともかくとしても、事情によってはメーカーに過失致死罪が、石原等には信用毀損罪がかかるということは、もはや疑いのないところである。従つて、この状態のまま放棄されることは許されない。どちらかが不当な疑惑をうけているかということ、を明らかにする必要がある。つまり死因鑑定の必要があることになる。

いづれにしても死因の解明は社会秩序の維持にとって、この上もなく重要なことであり、死因に疑いがあるとなると当局は、例えば「北極までいつても死体をほりおこす」ことになるのである。

(2) 登山者の生命を守るため……  
ところが上述の石原の発表の真实性に対す

る客観的判定は、死因究明のために必要であるばかりでなく、登山者の生命を守る上にとりうしても必要なものである。即ち、死因という過去のことと共に、危険防止という将来のことのために必要なのである。

現在ナイロンザイルを持つている登山者は多いが、その人達は我々から「その生命綱には恐るべき欠点がある」と云われて一時は大きなショックを受けたが、そのうち大部分の人達は早稲田大学S氏の「ナイロンザイルには欠点はない。石原達は嘘をいつているのだ」と云う言葉を信じ、ザイルには欠点はないと思つている。だからもしもナイロンザイルに本当に欠点があるとすれば、こんな危険なことではない、一刻も早く知らせてやらねばならないのである。死因鑑定以外に、この解決が急がれた理由がここにある。

ハ これを解決するには何がキーポイントか。

上述のように前穂高岳での遭難墜死事件の原因は、石原の発表どおりザイルが弱くて切れたためか、それとも石原達が登山中何か大きな失敗をしておきながら誰もみていないの

を幸いとして、それをかくしてザイルそのものが悪かったように嘘の発表をしたかのどちらかである。井上靖氏は墜落者自身が、あらかじめザイルに傷をつけておくと云う方法で自殺したと云う場合を、この所に含めておられる。

この判定には次の点で第一のキーポイントである。それは石原はザイルが切れたときの五〇糶墜落の模様を詳細に図入りで発表しているの、もしもそのとき使ったザイルと同種のザイルが石原の発表した状態で切れるものなれば、ザイルが切れたと云うことになり又その条件で従来の麻ザイルは切れないと云うことならば保証付ザイルとは何ぞやと云う業務上過失致死の問題に発展する。しかし逆にそういう条件では絶体に切れないと云うことになると、石原が嘘をいつていることになる。

要するに死因鑑定のキーポイントは石原の発表した条件を再現してみることである。

なお再現にあたって一番問題なのは温度である。事件がおきたときの温度はマイナス二十度ぐらいであるから、その温度で実験しなければならぬが実際にはこの実験はむづか

る。

#### （五）私の実験

どうかという。おそらく死体解剖を必要とする点である。今回の場合でも同じであつて、死因を究極的にはつきりさせるためには、遺体が発見され、それにザイルが結ばれたまま、しかもその切れ口が、あまり大きな力が加わらないままに、（大きな力が加われば、欠点のないザイルでも切れるから）岩角で切れたという証明がなくてはならない。しかしもとよりこれは死因鑑定についてだけ必要なことであつて、今後の遭難を防止するという上述の第二の必要のためには死体発見は必要でなくナイロンザイルに果してそういう欠点があるかどうかという点だけがわかればよいことである。

（六）誰が実験すべきか……

それはその能力があり且つどちらの側にもつかないという客観性の高い人又は機関でなくてはならない。かりに遺族が、損害賠償の訴訟を行つていたとすれば、裁判所は、そういう所へ鑑定を命じていたであらう。だからたとえ遺族にその能力があり又、その実験は実現的なものであると主張したとしても、社会に対して何の力もないことは明らかであ

しい。

しかしナイロンはマイナス七〇度ぐらいまでは強くなる一方だということがわかつているので、常温で実験がなされれば充分である。常温で切れるようならば問題にならないことになる。従つてその点さえ明らかになれば死因はきまつたも同様であるが実はもう一つ必要な点がある。

何故上述のことだけで足りないかといふと、次の疑問があるからである。たとえば乳幼児の死の原因が「ミルクに砒素が入つていたためではないか」という疑問があつたとする。この死因を鑑定するための第一のキーポイントはいうまでもなくミルクとして売りだされたものに、致死量の砒素の混入というけしからん事実があつたかどうかという点であるが、これが証明されたとしてもまだ死因は確かにそうとはいえない。何故かといふと、その砒素を飲んだ直後、また砒素の毒がまわらないうちに、その乳幼児は別の原因、たとえば心臓マヒで死んだとすれば、ミルク会社は死に対する責任をおう必要はないのである。従つて、死因鑑定のための第二のキーポイントは、その乳幼児の死因が砒素のためか

らの光景を私達は、はりさけるような、どこへももってゆきどころのない気持で眺め、ただ黙々と自分達のおかれた運命のきびしき、悲しさをかみしめていたのである。

一月三十日、三十一日には、名大土木教室の「あかし」という引っぱり試験器を借用し、助手の方に手伝つていただいて正確なデータをとつた。装置に岩角をとりつけねばならぬがありきたりの岩角では、均一性に乏しく基礎的実験としてはかえつて不適當であるので、たまたまあつた。鉄の三角柱を利用した。

稜角の一つは六六・五度あつた。稜線のするどさは指でおしてみて、痛いくらいで、大體穂高の岩角のそれと似ていた。これに事故のおきたナイロンザイルをかけてひっぱつてみたところ、そのザイルはメーカーでは一〇×三〇kgというデータが示されていたが驚くべきことに、七〇kg位乃至九〇kgで切れた。登山者は冬では、重裝備であるので、これくらいの重さは充分である。これでは人間が静かにぶら下つただけで切れるわけである。実験にたずさわつた人々は、あまりのもろさに言葉もなかつた。

ちょうどこの実験の後で、大阪在住の私の友人で著名登山家S氏から、二月九日大阪朝日新聞で、日本山岳会関西支部主催のナイロンザイルの検討会と富士山での遭難報告をひらくから出てくるようにとの案内をいただいたので、私は出かけていった。このときは、大阪大学教授、日本山岳会関西支部長で、応用物理学専攻、登山用具の権威である篠田博士とか藤木九三氏とか外二十名ほど出席されていた。篠田博士からは「自分はナイロンザイル切断原因の究明にとりかかったが、目下はじめてばかりで何もわかっていない」という報告があった。(これより前、一月二十四日私の友人、学習院大学教授のK氏から「篠田氏ともお話ししたが、ナイロンザイルが鋭い岩角には弱いという君の説には、必ずしも賛成できない」というお手紙をいただいていた)私は遭難報告をした後、前記実験を函をかいで説明した。篠田氏はじめ、殆どの人人は、手帳に写しておられた。その翌々日、スポーツ新聞に、このナイロンザイル検討会のこと掲載されたが、もとより私の実験のことは全くふれてなかった。

ついで山岳雑誌「山と溪谷」と「岳人」の

二月号には、私が上高地でかいた報告書の全文が掲載された。それについて「岳人」では、「世にも不思議な出来事」という見出しがついており、「山と溪谷」では、私の記事の後へ「ナイロンザイルの切断事故は、山岳界に大きなショックを与えた。次号に阪大の篠田教授の実験報告を発表する」とかかかれてあり、又同時に、前記K氏の記事として「現在の山岳界で、この問題に答える人はない。この重大なときに発表出来ないのが現状で、素人考えはやめて、科学的調査による必要がある」と掲載され、この問題はいよいよ注目をあび、登山界はもとより一般社会も、篠田教授の実験結果の発表を待ったわけである。篠田教授は、正に本件を鑑定するにふさわしい人として、衆日の集るところであったからである。

#### (六) 公開実験

四月二十日頃、私の属する三重県山岳連盟に対し、四月二十九日篠田教授、御指導になるザイルの公開実験が愛知県蒲郡で行われるから見学にくるようにと案内があった。又前記ザイル業者のK氏から私に対して「公開実

験が行なわれるがあなたは実験を見にこられない方がよいと思う」という電話があった。私はその意味はよくわからなかったがいよいよ公開実験がなされると知って、結果はもとより明らかとは信じつつも、胸のときめきを感じずにはおられなかった。しかし四月二十九日は遺体の大々的な捜索を行うため、穂高に出発することになっていた。それ以前に篠田教授にお目にかかっておきたいと考えたことと、メーカーと私の父とが二回面談し、ものわかれとなっていて私も苦しい立場にあったので、このことを篠田教授へ御相談したいと前々から考えていたので、四月二十四日岩稜会の伊藤とともに大阪に出むいたのである。

まづ伊藤と知人の大阪M運動具店のS氏にお目にかかった。S氏は篠田教授の教子であり、この事件には、当初から大きな関心をもっておられた。S氏は御承知のように自分は三十年一月号の「岳人」に「ナイロンザイルは、すべての点で優れており、今後ザイルはナイロンザイルと、とつてかわるだろう」ということを書いたもので、今回の事件には責任を感じている。しかしナイロンザイルは岩

角に弱く、全く問題にならないことがわかった。うちにも舶来品があるが、返品することが出来ないで、ブツブツに切って看板取りにしてしまった。先日も篠田教授が東洋レイン研究室で実験されたがその結果、横からの圧力に対しては、ナイロンは麻ザイルの一桁弱く、とくに事故をおこした8ミリ強力ナイロンザイルは二十分の一の力しかなく、ザイルとして全く不適當ということがわかった」と語られた。私はS氏に、私の父とメーカーとの会見が、ものわかれになっていることを伝え、その点に関し篠田教授に御相談申し上げたいと伝えるとS氏はすぐ替成して、篠田教授に電話して下さった。結局、篠田氏と日本山岳会関西支部のルームでお目にかかることとなったのである。

このとき私は次のことを申しあげた。「メーカーから代表者がみえて、父に二度会っていただいた。メーカーは非常に丁寧に用意を述べられるがしかし、何故ザイルが切れたかと云う点になると、メーカーは使用者の誤りと主張し、父はザイルの欠点と主張して衝突してしまう。

特に第二回目の会見では同行されたK氏が

ら、ザイルの結び目に関する疑問さえも感ぜられる発言が出され、ここに於てこれ以上の話は両者のみで面談しても無意味であると考えられるようになった。こゝで私が思うのに、当事者のみの会合であるために話がうまく進行しないのであるまいか、もし両者が信用でき得る第三者を間に入れて会談すれば、会談がうまく行くのではないか、それは父も決して無理なことをいう筈はないと考えているからである。現在両者の間に仲裁の労をとるにふさわしい人としては、篠田先生以外にはないと考へている。誠に面例なお願ひだが仲裁の労をとっていただけないか。」

これについて篠田教授は次のように云われた。「東京製綱はこの事件の為に、ザイル以外の商品にまで販売力が落ちたことで、逆に被害者側をうらんでいる。私としては、斯うらみ方は決して正しいことではないと考えている。併し気の毒とは思っている。ザイル切断の事は登山界にとって非常に大きな出来事で、是非共その原因を究明しなくてはならない。

自分も努力を続けているが、その努力は科学者というよりもむしろアルピニストとして

やらなくてはならないと思うからやっている。そうなると、当然自分の金で研究しなくてはならないが、資金の関係で困難であり、たまたま、メーカーから研究依頼があったので、その資金によって研究している。遺族とメーカーとの見解が対立しているときに、一方の側の援助で研究するということは本意ではないが、それだからといって結果を誤るということは絶対ない。仲裁の労については、いましばらくまってもらいたい。結論はこの四月終りの東京製綱蒲郡工場で行う実験によって判明するはずであり、結果は五月中旬に出せると思うからそれまでまってもらいたい。その内容はあなたの方に有利であっても、メーカーに有利になることは絶対ない。なおお自身は、仲裁の労をとることに異存はないが、出資者に不利な結果を出した者を、メーカーが仲裁者として承諾するかどうかは不明である。メーカーが断った場合は、残念ながら仲裁の労はとれない」(このときのこと、朝日新聞三十一年六月二十四日に篠田氏談として出ている)

私達は篠田氏のお言葉から、公開実験の結果に対し、全服安心し、篠田氏に衷心から感

謝申し上げたのである。

公開実験の前日、四月二十八日の夜行で私は、両親はじめ大勢の人々の盛んな見送りをうけて遺体の捜索に出発した。

私達は弟がテントから出たまま、遂にかえらなかつた雪の又白池についた。

私達は、遺体は第二テラスで発見されるにちがいないと考えていたが、その第二テラスは、冬よりももっと積雪が増していて、約六十度の傾斜でAフェースにせりあがり、捜索は危険であり且つザイルにぶら下ってピッケルやスコップではってみても、まるで無駄な努力であった。そうした焦慮の努力がなされていくとき、後発隊の伊藤達が出てきた。同時に、公開実験を報じた中部日本新聞の記事を持参したのである。

伊藤は黙ってふるう手で私に渡した。私はそれをテントの前の雪の上で立ったまま読んでみた。記事は六段ぬきの写真入りであったが、私はそれを読み終るなり「実験はインチキだ、手品だ」と叫んでいた。しかし誰一人この記事を疑うものはいない。私はいまや、仲間の人々からも冷たい目で見られていることを感ぜずにはおれない。篠田教授に、私と一緒に

お目にかかった伊藤まで、意気消沈していたのである。中日の記事は次のようにかかれてあった。

「北アルプス前穂高岳でザイルが切れ、三重大学生が墜死したが、この事故に対処し、メーカールの東京製綱では工費百万円を投じてザイルの衝撃落下試験装置をつくったが、遺体捜索隊が穂高に向ったという四月二十九日、篠田教授指導により、多数の登山家、新聞記者列席のもとに、大々的な実験が公開された。その装置は、身体の重さの錘をウインチで持ちあげ、四十五度、九十度の岩角の上の任意の位置からおとすというものである。この実験の結果、前穂高岳で切断したザイルと同種のザイルを、四十五度の岩角にかけ、切断時と同一条件で落下させたが、ザイルは切れず、又落下距離を数倍高くしてみても切れず、ザイルを岩角で横にこすりつける実験でも切れなかった。だから前穂高岳での事故が、エッジ上の衝撃という想像は、影がうすくなった。又ナイロンザイルは、鋭い岩角にかかったときには、弱いのではないかといわれていたが、そういうときでもナイロンザイルは、麻ザイルの数倍強いことがわかつた」というものである。

メット会社にも比すべき良心的な態度であった」という評判が、社会のすみずみまで拡がったのである。これは正に、個人に死にまさる苦痛と（氷壁の魚津は公開実験のため会社を敵になり小坂の葬儀にも出れなくなっているし、山で死んだとき、人々から自殺したと思われている）一般大衆（登山者）の生命の犠牲の上につくりあげられた莫大な利益である。最近のせちがらい世の中では、どのような方法で利益をあげてもかまわないのかもしれないが、しかし大衆の生命を犠牲にしてまで、利益をうるものが果して許されるであろうか、とくに国家公務員であり、国民の指導者たるべき学者にそんなことが許されてよいであろうか、私は、弟の死にからむこの事件がかくもおそろしいことに発展したことに戦慄を感ぜずにはおれなかった。

としての責任上、よもや誤った報道をするはずはない。それがどうしてこのような恐ろしい誤りが発生したのであろうか。私は、こんなことを想像してはいけなかもしれないがメーカールが登山者の死に対する当局の追求をのがれるため、又遺族からの損害賠償をのがれるため、ひいては失墜した信用を一挙に回復するため、篠田教授というもともと客観性の高い、誰しも信用せずにはおれない人に頼みこんで、巧妙に見やぶられぬトリックを使つて、新聞記者、登山者ひいては一般社会をおざむいたのではないか、私にはそれ以外にこの不可解をとく方法を考えることが出来ないものであった。いづれにしてもこの不可解なまゝ実験の結果として、メーカールは上記の不当の利益をえたことは事実なのである。

例えば信用の点についていえば「メーカールはもともと良心的で、立派なザイルを製造していたのだ。それが不屈な登山家によって切れないザイルを切れたと宣伝され、無実の罪を着せられていたわけで誠に気の毒であった。加うるに、篠田教授に協力して、百万円もの設備をつくつてまで、死因の究明を登山者の安全のために努力したことは、英国の

た」というものである。

#### (七) 公開実験の社会的影響

いうまでもなくこの公開実験は、前記実験のキーポイントを完全に実施している。何ら文句のつけようのないものである。しかしもとより篠田教授が五日前に私にいわれたことと正反対である。一体これはどうしたということであろうか。私は、自分で実験をしていたので、その実験データをみて、実験に使われた岩角が丸くなっていたにちがいないといふことを確信した。しかしもしそうとしても、私達がナイロンザイルの欠点に関する仮説を提起したとき、はっきりと岩角が穂高の岩のように、角が丸くない場合に、ナイロンザイルに欠点があるのではないかといっているのである。又これは常識から考えても当然なことである。篠田教授はこのことを充分御存じなのだから、何の意味のない丸い岩角での実験、しかも結果が正反対となるような実験を篠田教授がだまつて公開されるということとは考えられないことである。しかも中日は「岳人」編集部が登山家がついていっているはずであり、もとより影響の大きい報道機関

いことはないわけである。

さて、現実はずいぶん一変した。山を下りた私は悲惨であった。私のチャチな実験装置は、誰ものごころとはしなかった。インチキ実験の烙印をおされてしまったからである。父は「残念ながら石原が何かやったか、五郎が失敗したかのどちらかになった。しかし、いづれにしても石原に一ばい、くわせられた。おかげでNHKから『息子は新製品の試験台になった』などとラジオ放送をしてもらった赤恥をかいた。村の人々にもあわす顔がない。石原はそういうウソをいう人間だ。こういうことでは五郎が死んだのも、五郎の失敗でなくて石原が何かしたにちがいない。お前もお前だ。そういう石原をかばっていたとは何事だ」と私にくつてかき、石原を殺人罪で告訴するといいたのである。私は「篠田氏の実験こそインチキだ。今にそれがわかる。五郎の遺体が見つかるまでは、がまんして下さい」と父に頼んでいるうちに悲しく情けなく、半泣きになってしまった。（七十四才であった父は、この結果もまた一昨年病死した）

一方、登山界の態度はこれによって決定し



た。たとえば、「山と溪谷」は「メーカーは問題のザイルを科学的実験によって保証した」と記し、他の山岳書でも「ナイロンザイルは非のうちどころがない」と報じたのである。

#### (六) むすび

紙面の都合で詳しく述べる事が出来ないがこのあとで、七月末には、遺体がザイルを結んだままで発見され、ザイルの切れ口は、約五十糎にわたって、ザイルが岩角で切断したときの特有の縦傷（私の仮称、後での実験によりそれと同じ切れ口が再現出来た）を示していた。更に八月六日現場の調査を行ったが、その際、ザイルをかけた岩角には、奇蹟といおうか、これ又ザイルが岩角で簡単に切れたことを示す三種の型のナイロンの繊維が石原の発表したそのままの岩角に附着していた。又その岩角の型（稜角約九十度）を石膏でうつしとり、それをもちかえって、それと類似した岩角を使って実験したところ、事故をおこした同種のザイルには、五十糎のずれおちで切れるのに、麻ザイルには数回のくりかえしによっても殆んど傷がつかなかったのである。この事件はこの後、私達は、社会

の正義と秩序を守るために絶対にウヤムヤには出来ないと考え、まず話し合いによる解決を求めたのであるが、篠田氏から「公務多忙」等の理由で面会の機会を与えられず、円満解決は不可能となり、やむなく訴訟事件へと発展した。しかし、その後この公開実験よりも更に不可解なことがおきた。それは朝日新聞に検察当局の見解が発表されたがそれによると「篠田教授の行為は告訴人のいう通りであるがしかしそうした行為は良心的である」というのである。これは正に驚くべき大事件と考えるがこういう点については又の機会にゆづりたい。

#### 「氷壁」のアウトライン

山に魅せられた若い登山家の魚津恭太と小坂乙彦は、常にザイルに生命をつないで兄弟のような間柄だった。ある年の正月休みに二人で登った穂高の氷壁で小坂は墜死する。使用したナイロン・ザイルが切れたのだが、ザイル製造会社では実験によってザイルの切れないことを証明する。それが魚津の勤務する

親会社であったため魚津の立場は苦しくなる。小坂が慕っていた美しい人妻、八代美那子の夫教之助がザイルの実験担当者だった。魚津はその美那子ともいくらか会ううち自分も美那子にひかれていくことに気づく。彼女もまた同じ思いであった。五月になつて、小坂の死体が発見され、魚津は小坂の妹かおるとともに穂高に行く。その時かおるは魚津に結婚したいと打明けた兄弟のようだった。小坂の可哀な妹と結婚するのがもつともよい道と考えた彼は、心の中にわだかまる美那子への思いを絶とうと決意する。彼はそのためもう一度、穂高に登った。だが大自然の悲情さは若者の切なる願いも一瞬に奪いさる……。

というのが「氷壁」のあらまし。魚津というのが石原君であり死んだ若山君が小坂となっている。八代教之助というのは大阪大学教授篠田軍治博士のこと。しかし、小説は後半において大分、事実とちがってくる。なぜなら、ナイロン・ザイルの事件はまだ解決していないから……。